

## 身体技法の習得と身体の抵抗

— マンチェスターの太極拳を事例として —

倉 島 哲\*

### はじめに

身体技法を習得することは、身体が社会的位置の刻印を受けることで、社会構造の再生産の媒体になることであると一般的に考えられている。身体技法に対するこのような理解は、身体技法の概念を最初に提出したマルセル・モースの議論にも、身体をめぐる現代的状況を考えるうえで欠かせない二人の思想家、ピエール・ブルデューとミシェル・フーコーの議論にも認めることができる。

しかしながら、身体は、社会的位置の刻印を一方向的に受けるだけの、可塑的な素材ではないように思われる。というのも、どのような身体技法であれ、それを身に付けようとするときに、身体が自分の思うままにならない場合があることを、われわれは経験的に知っているからである。

たとえば、身体技法の指導者の動作を模倣しようとしても、自分の身体が思うように動かない経験や、一時は上手に模倣できたように思えても、実際は癖のある動作が身に付いていたことが後になってわかる経験は一般的である。このような、意思に対する身体の抵抗（以下、「身体の抵抗」と略記）を認めたならば、身体技法の習得を、身体に対する社会的位置の一方向的な刻印として捉えることはできないのではないだろうか。

本稿では、身体の抵抗を捉えることで、身体技法の習得と社会的再生産の一見して必然的な関係を解体することを目指す。その方法として、最初に、身体技法の習得と社会的再生産をめぐる理論のうち主要なものを検討し、身体の抵抗を認めることで両者の結び付きを解けることを示したい。次に、イギリスはマンチェスターにおける太極拳教室であるC太極拳センター（以下、「Cセンター」と略記）を考察することで、身体技法の習得過程における身体の抵抗のあ

---

\* くらしま あきら 関西学院大学社会学部

りようを具体的に描き出すことにしたい。

太極拳のように、身体技法の習得が焦点化されている実践では、日常生活と比較して身体の抵抗も焦点化されていることが予想される。だが他方で、太極拳は中国の歴史文化的伝統に根付いた身体技法として固有の社会的位置を占めており、イギリスにおいては、中国に対するエキゾチズムのためにこの社会的位置が強調されていることが予想される。このような社会的位置を占めている太極拳の身体技法の習得に、身体に対する社会的位置の刻印のみならず、身体の抵抗を認めることは可能なのだろうか。

調査の方法としては、16ヶ月間（2006年1月～3月、2007年1月～2008年3月）にわたって週に二回（火曜日と木曜日）の練習の参与観察を行ったほか、指導員と上級クラスの生徒の大部分（指導員2名、生徒12名）の個別インタビューを行った。

## 1 身体技法と社会的再生産

身体技法の概念を創造したのは、フランスの社会学者であり人類学者であったマルセル・モースである。彼は、泳ぎ方や歩き方などの様々な日常的な所作のありようが、行為者の属する社会に応じて、また、社会のなかで行為者が占める地位・職種・世代・年齢・性別など、さまざまな社会的要因に応じて異なっていることに着目し、このような社会相対的な身体の使用法を身体技法 (*les techniques du corps*) と名づけた。したがって、身体技法は、各種の社会的要因の差異よりなる構造のなかに位置づけられているといえる。(Mauss, 1968 = 1976, 1979)

身体技法が社会構造のなかに位置づけられているとき、身体技法を習得した行為者は、この構造内の特定の位置の刻印を身体に受けていることになる。モースがあげる例のひとつをあげれば、フランス人の看護婦が歩くのを目にしたモースは、すぐにそれを、アメリカ映画のなかで見た歩き方だと気づいたという。これが可能だったのは、フランスの女性とアメリカの女性が、それぞれの固有の歩き方をそれぞれの社会において習得することで、フランスとアメリカの差異の刻印を身体に受けているからである。こうして刻印を受けた身体は、フランスとアメリカの差異を歩き方の差異として再生産している。このように、身体技法が社会的位置に対応している以上、これを習得した行為者の身体が社会構造を再生産する媒体になることは必然的だといえる。

だが、身体が意思に抵抗するとき、行為者はつねに社会的位置に対応した身体技法を習得するとは限らず、また、身体も社会的再生産の媒体として形成されるとは限らないのではないだろうか。ここでは、身体技法の習得と社会構造の再生産を結び付ける三つの理論的立場を検討し、それぞれに身体の抵抗を認める余地を探りたい。

### 1-1 威光模倣

モースは、身体技法の習得を威光模倣（imitation prestigieuse）の概念によって説明する。それは、次のような一連の過程を指す概念である。まず、権威を持ち人々の信頼を集める者、つまり、社会的な権威者が、行為者の目の前で行為を成功させ、その有効性を証明したとき、権威者は行為者に対して威光を放つようになる。次に、この威光に触発された行為者は、権威者の行為を模倣するようになり、権威者と同じ身体技法を習得するのである。（Mauss, 1968 = 1976, 1979）

威光模倣の対象がつねに社会的な権威者であることを踏まえたなら、一見して、それは社会構造の再生産しかもたらさないかに見える。しかし、モースの議論に従えば、権威者はつねに威光を放つとは限らず、また、威光を放つ場合でも、権威者の行為がすべて模倣されるわけではないことに注意する必要がある。というのも、権威者は、行為者の目の前で行為を成功させたときにのみ威光を放ち、また、権威者の行為のなかでも、成功したものだけが模倣の対象になるとされているからである。

そのうえ、行為の成功は、モースの思想において、権威や地位などの社会的要因には還元できない、行為それ自体の有効性に由来するものとして位置づけられている。これは、次の三点に読み取ることができる。第一に、威光模倣の成立のための必要条件である、模倣対象者の権威と模倣対象行為の成功が、「有効かつ伝承的」な身体の使用法という身体技法を定義する二要件に（順序こそ逆であるが）対応していること。第二に、行為の有効性が、「物理的・化学的・生理化学的」な有効性とされていること。第三に、身体技法の研究のためには、「生理学的視点・心理学的視点・社会学的視点」という「三重の視点」が必要であるとされており、身体技法の有効性を捉えるべき生理学的視点と心理学的視点が、その伝承性を捉えるべき社会学的視点と相補的なものとして位置づけられていること。これら三点を踏まえれば、威光模倣とは、社会的要因に還元できない有効性が認められるか否かというフィルターを介して、権威者の行為を選択的に模倣することだといえる。

しかしながら、モースの記述からは、行為者が具体的にどのようにして行為の有効性を認識するかを読み取ることはできない。科学的な測定装置のない日常的な場面で、行為者はどのようにして「物理的・化学的・生理化学的」な有効性を認識するのだろうか。同様に、行為の生理学的そして心理学的な有効性を、生理学者でも心理学者でもない行為者はどのようにして認識するのだろうか。科学的認識とは、科学的に正当と認められた手続きに従った認識である以上、日常的な威光模倣がつねに行為の有効性の科学的認識を契機として開始されると考えることには無理がある。この点において、モースは、科学的認識を行為者の日常的認識に投影してしまっているのである。

ここで、社会的要因に還元できない有効性が、行為者自身の身体の抵抗を介して認識される

と考えることはできないだろうか。つまり、権威者の行為が何らかの成果をもたらすのを目にした行為者が、権威者とは異なる方法で同じ成果を得ようとしても身体が思い通りに動かずうまくいかないとき、権威者の行為は、たんに権威者が行ったこととして社会的文脈において認識されるのみならず、「実際に」有効な行為として、いいかえれば、模倣に値する身体技法として認識されるはずである。モース自身があげる例を援用すれば、彼は第一次世界大戦に従軍中に、オーストラリア兵が泥のなかでしゃがんで休憩するのを目の当たりにしたが、自分はしゃがむことができなかった。このとき、彼はしゃがむことが有効な身体技法であると認識したという。このように、自分自身の身体の抵抗として認識される「実際の」有効性を、モースは「物理的・化学的・生理化学的」な有効性として、科学的用語を借りて表現しているのではないだろうか。

社会的要因に還元できない行為の有効性が、身体の抵抗という独立した契機を介して認識されるなら、威光模倣はより創造的な実践へと結びつくはずである。つまり、威光模倣においては権威者の行為のなかから模倣に値する身体技法を選択するためのフィルターとして機能するにとどまっていた身体の抵抗が、新しい身体技法を創造するための独立した手がかりとして機能しさえすればよいのである。この原理的な可能性は、Cセンターにおいて具体的にどのように実現されるのだろうか。

## 1-2 ハビトゥスの規則化

フランスの社会学者であるピエール・ブルデューは、モースと同様に、日常的な所作のありようが行為者の地位や職種などの各種の社会的要因に応じて異なっていることに着目する。だが、モースと異なり、ブルデューは様々な日常的局面における所作のありように関連関係を認める。たとえば、特定の職業を選択した人々は、子弟を特定の学校に入れる傾向があり、余暇には特定のスポーツや特定の音楽ジャンルを好む傾向があることを、統計的に示したのである。(Bourdieu, 1972 = 1977, 1979 = 1990)

行為者は、個々の局面 (champ) において自分がどのように身体を使用するかを意識していても、自分の身体の使用法が、多様な局面をまたいで特定の傾向を持っていることは意識していない。にもかかわらず、このような傾向は存在する。このように意識されない傾向を説明するために、ブルデューは、個々の局面における身体の使用法を無意識のうちに傾向づける原理としての、メタレベルの身体の使用法を措定し、これをハビトゥス (habitus) と名づける。したがって、行為者はそれぞれの局面で意識的に行為しているように主観的に感じている、実際に行為を生成しているのは、無意識のうちに機能する身体的原理としてのハビトゥスであることになる。

ブルデューは、ハビトゥスを相互に比較するために、個々の局面がすべてその派生物である

ような、メタレベルの社会構造として社会空間（l'espace social）を措定し、この空間にハビトゥスを位置づける。このとき、個々の局面における行為者どうしの関係はすべて、社会空間における行為者のハビトゥスどうしの関係と相同である。そのため、個々の局面において行為者が行いうる行為とその成功可能性は、社会空間におけるハビトゥスの位置によって客観的に規定されていることになる。ハビトゥスは、行為者の主観的意思とは無関係に、それぞれの局面において成功した行為は繰り返し、失敗した行為は修正するため、結果的に、それぞれの局面において成功可能性のもっとも高い行為だけを生成するようになる。こうしてハビトゥスが規則化された結果、行為者は無意識のうちに、個々の局面における客観的可能性に対応した主観的努力をするようになるのである。

ハビトゥスは狭義の行為のみならず、認識という行為のありようも傾向づけるため、ハビトゥスが規則化された行為者は、自分が成功しやすい行為は自分にふさわしいものとして認識し、成功しにくい行為は考えられないものとして最初から認識しないようになる。こうして形成された行為者の主観を、ブルデューはドクサ（doxa）と呼ぶ。ドクサのために、行為者は社会空間におけるみずからのハビトゥスの位置と矛盾する行為を行う可能性はきわめて低くなり、社会空間は高い確率で再生産される。

モースの描く威光模倣では、行為者による模倣対象行為の有効性の認識が必要条件とされていたため、行為者の意思に対する身体の抵抗を認める余地があった。だが、ハビトゥスの規則化は行為者の無意識のうちに進行する過程とされるため、そこに意思に対する身体の抵抗を認める余地はない。したがって、ハビトゥスの規則化とは、行為者の意思如何にかかわらず社会空間におけるハビトゥスの位置が一方向的に身体に刻印されることで、この構造を高い確率で再生産する行為を自動的に生成する身体が形成されることだといえる。

しかし、あらゆる局面における行為がハビトゥスによって無意識のうちに生成されるという説明は、現実の行為のありように即しているだろうか。ジョン・マルゴリスによれば、歩いたり眠ったりする半自動的な行為から、論文の執筆などの高度に解釈的な行為まで、あらゆる行為が等しくハビトゥスによって無意識のうちに生成されるとするブルデューの主張は、日常的経験と矛盾するのみならず、実証的な裏付けを欠いている。というのも、ブルデューは実践における個人の認知プロセスのミクロな分析を行っていないからである。かわりに、社会集団の統計的分析から導かれた集約的な行為の傾向から、それをもたらしたはずの個人的な認知の傾向を演繹しているにすぎない。そのため、ハビトゥス概念は、実践における認知の実態に踏み込むことなく、ただ、実践における認知が無意識的に滞りなく行われるという表層的な事実を追認するにとどまるのである。（Margolis, 1999）

したがって、集約的な行為の傾向から演繹できるかぎりでの個人的な認知の傾向ではなく、実践における個人的な認知それ自体を捉えるためには、ハビトゥス概念から距離を置くことが

必要だろう。これを行ったとき、行為者の認知は、一方的に社会構造の刻印を受けたハビトゥスが形成するドクサとしてではなく、身体を刻印しようとする社会的位置とこれに抵抗しようとする身体のせめぎあいの産物として位置づけられるはずである。Cセンターの分析では、このようなせめぎあいの産物としての行為者の認知を捉えたい。

### 1-3 規律＝訓練

フランスの歴史家であるミシェル・フーコーの規律＝訓練 (discipline) の概念は、日常的な所作のありようがいかにして社会的位置の刻印を受けるかを説明している点で、モースの威光模倣の概念、ならびに、ブルデューのハビトゥスの規則化の概念と共通している。しかし、これらの概念にはない特徴として、規律＝訓練の概念においては、身体に対する社会的位置の刻印が、精神を社会構造に従属した主体として形成することを介して行われることが指摘されている点をあげることができる。

規律＝訓練の概念は、近代社会の権力の性質を論じる過程でフーコーが提出したものである。近代社会の権力とそれ以前の権力の相違は、逸脱者に対する刑罰のありようの変化にうかがえる。近代以前の刑罰とは、犯罪者を公開の場に引き出して、その肉体の破壊や変形によって権力者の力を誇示することであった。それに対し、近代以降の刑罰とは、犯罪者を監獄に閉じ込め、その精神を矯正し更正させることである。だが、これは権力の人間化として手放しで賞賛できることではない。(Foucault, 1975 = 1977)

近代以降の権力の理念が表現されているのが、18世紀末にジェレミー・ベンサムによって考案されたパノプティコン (一望監視施設) である。これは監獄の一種であるが、最小の監視費用で最大数の犯罪者が矯正できるよう設計されている。これを構成するのは、中庭の周囲に円形に並べられた独房と、全周の独房を一望できる中央の監視塔である。独房は相互に連絡が取れないように隔壁で仕切られているが、それぞれの独房の中庭に面した壁は鉄格子になっており、反対の壁には明り取りの窓があるため、監視塔からは独房の内部がよく見えるようになっている。だが、監視塔は内部を暗くしてあるため、独房からは監視者の姿を見ることができない。

このような装置に収監された囚人は、孤立した裸の身体として監視者の一方的な視線にさらされるうえ、いつ監視者の視線にさらされているかを知ることができない。そのため、囚人は四六時中たえず自分の身体を監視しつづけ、定められた規則と日課に従って規律的に振る舞うようになる。こうして、囚人は権力の視線を内面化することで、みずからの身体を管理する主体になるのである。このように、権力の対象としての身体に、空間と時間を配置する技術が適用されることで、精神の主体化＝従属化 (assujettissement) がもたらされる過程を、フーコーは規律＝訓練と呼ぶ。

規律＝訓練は、社会の逸脱者を矯正するための監獄のみならず、軍隊、学校、工場、精神病院など、近代社会が作り出した制度の多くに認めることができる。これらの制度はかならずしも物理的な建造物としてのパノプティコンに身体を収容するとは限らないが、身体を権力の対象として取り上げ、これに空間と時間を配置する技術を適用することで精神を主体化＝従属化する点では同じである。このような技術としては、起居動作から道具や機械の操作に至るまでの身体的な動作の訓練、整列や行進そして座席の配置などの空間の管理、起床から就寝までの時間の管理などがあげられる。こうした技術の適用により、権力に対して従順な身体が形成されたうえで、監視の視線が内面化され、精神は主体化＝従属化される。こうして形成された、従順な身体と主体的な精神を併せ持つ行為者は、主体的に規律に従う労働者として近代産業社会を支え、その権力構造を再生産することになる。

主体がつねに身体を規律＝訓練する権力によって形成されたものならば、主体的な抵抗によって権力構造を変化させることはできないはずである。抵抗の可能性は、主体以前の行為者、つまり、規律＝訓練が失敗して、主体化＝従属化が実現しなかった行為者に求めるほかないだろう。規律＝訓練のために空間と時間を配置する技術が偏在することで、社会全体がパノプティコンと化している現代的状況にあって、主体化＝従属化されていない行為者に抵抗の可能性を託すのは、一見したところ心許ないが、はたしてそうだろうか。

本来、身体の振る舞いが規定されていることと、身体が規定どおりに振る舞うこととは別のことのはずである。そして、意思に対する身体の抵抗は、両者の乖離をもたらす大きな要因のひとつだと思われる。これを踏まえたならば、どれほど監視を徹底させ、違反に対する処罰を厳しくしようとも、規定された振る舞いと実際の振る舞いを同一視することはできないのではないだろうか。空間と時間を配置する技術の極致であるパノプティコンにおいてすら、内面化されるのは規定された身体の振る舞いそのものではなく、身体に対する監視の視線にすぎない。そのため、この視線に対して身体が抵抗する可能性は依然として残されているのである。

このように考えると、パノプティコンがベンサムの表現した権力の理念であるように、規律＝訓練もまた、フーコーの表現した権力の理念であることがわかる。Cセンターの分析では、権力が浸透しない不透明な身体を視野に入れることで、権力の現実の姿に接近したい。

#### 1-4 まとめ

威光模倣・ハビトゥスの規則化・規律＝訓練の三つの概念は、いずれも、身体が社会的位置の刻印を受けることで社会構造を再生産する媒体になる過程を説明しているとされる。しかし、社会的位置を刻印しようとする意思に対して身体が抵抗することを認めたくえでこれらの概念を再検討したなら、これらの概念が描いている身体技法の習得と社会構造の再生産の結び付きは必然的なものではなくなる。

威光模倣の概念を再検討したなら、威光模倣における行為者は自分の身体の抵抗を介して、社会的要因に還元できない有効性を行為に認識することができる存在として捉えられる。このような存在は、社会的権威者の行為から模倣に値する身体技法を選択したり、より有効な身体技法を新たに創造したりすることができる存在でもある。

ハビトゥスの規則化の概念を再検討したなら、ハビトゥスが高い確率で社会構造を再生産するのは、あらゆる行為がハビトゥスにより無意識的に生成されるという問題のある前提のためであることが見えてくる。この前提を取り去ったとき、実践における認知は、身体を刻印しようとする社会構造と、これに抵抗しようとする身体のせめぎあいの産物として捉えられるはずである。

規律＝訓練の概念を再検討したなら、身体の規律＝訓練が必然的に精神の主体化＝従属化を介した社会の権力構造の再生産をもたらすかに見えるのは、規律＝訓練が権力の理念であって、実態ではないためであることが見えてくる。そのため、身体の抵抗のために規律＝訓練が失敗する可能性を認めることで、権力の実態に接近することができる。

以上より、Cセンターの分析では、三つの現象——身体の抵抗を手がかりにした行為の有効性の認識、社会構造の刻印と身体の抵抗のせめぎあいの産物としての認知、身体の抵抗による規律＝訓練の失敗——に焦点を当てることにしたい。

## 2 太極拳とマンチェスター

Cセンターにおける身体技法の習得の詳細に立ち入る前に、太極拳・マンチェスター・Cセンターの概要をそれぞれ紹介しておきたい。

### 2-1 太極拳

太極拳とは、中国の黄河のほとりにある陳家溝（ちんかこう, Chenjiagou）という小村で生み出された武術である。陳家溝とは、中国河南省温県にあり、黄河の氾濫原に位置している小村である。名前が示すように古くから陳氏一族が住んでおり、「溝」とは、黄河の洪水のさいに村を守るために周囲をめぐらせた堀のことで、転じて村そのものを指すようになった。すべての太極拳の流派の源流である陳式太極拳は、陳氏の第9世陳王庭（ちん おうてい, Chen Wangting）が400年ほど前（17世紀初頭、明代末から清代初にかけて）にこの村で創始したとされる<sup>1)</sup>。それは300年近くの間、門外不出の秘伝とされてきたが、120年ほど前（19世紀中葉）に、陳氏の14世陳長興（ちん ちょうこう, Chen Changxing）がはじめて陳氏以外の人間に太極拳を教えた。教えを受けた陳家の使用人の楊露禪（よう ろぜん, Yang Luchan）が創始した楊式太極拳は北京を中心に流行し、これをもとに孫式、呉式、武式などの流派が生み出された。

これらの流派は、陳式と合わせて太極拳の五大流派と呼ばれる。その間も陳式は主に発祥地の村でのみ練習されていたが、1928年に陳発科（ちん はっか、Chen Fake）が北京で教授してから広く練習されるようになった。現在は、格闘技としてのみならず、陰陽思想、東洋医学、中国語そして中国を中心に世界各地に教室を構える正統継承者など、豊かな文化的意味に包まれた身体技法として世界中で練習されている。

## 2-2 マンチェスター

イギリスの大マンチェスター州の一部をなす都市圏で、人口は45.2万人（英国国家統計局、2001年調査に基づく2006年推計）。人口では、ロンドン、バーミンガムに次ぐ英国第三位の都市だが、政治的にはロンドンに次いで重要な都市である。エスニック・マイノリティの比率が高く、また、イギリスでも有数の規模のチャイナタウンを持つ都市として知られる。英国全体のエスニック・マイノリティの比率は9.1%であるのに対し、マンチェスターでは約2倍の19.0%である。また、英国全体の中国系住民の比率は人口の0.4%であるが、マンチェスターでは約3倍の1.3%にのぼる（英国国家統計局、2001年）。



(wikipedia 英語版より引用、番号は筆者が記入)

- 1 大マンチェスター都市圏
- 2 マンチェスター都市圏
- 3 トラフォード区
- 4 オールド・トラフォード

図1 マンチェスターの地図

### 2-3 Cセンター

マンチェスターに本拠を置く太極拳教室のなかで、もっとも規模が大きいのがCセンターである。それは、中国の湖南省出身のL先生によって1995年にマンチェスターに創設された。当初は公園などで練習していたが、生徒の一人がチャイナタウンにビルを所有しており、その4階を教室として使用するようになる。2000年には、大マンチェスター州、マンチェスター都市区の東南に隣接するトラフォード区のオールド・トラフォードに位置する中国医学の診療所が所有する建物に移り、現在もそこを本拠として活動している(図1)<sup>2)</sup>。

現在のCセンターの活動は、太極拳の指導に限られず多岐にわたっている。その概要は、Cセンターのインターネット・ウェブサイトのトップページで次のように紹介されている。

Cセンターは太極拳の原理と哲学の指導と普及活動を行っています。Cセンターはイギリスのマンチェスターに本拠を置いており、太極拳の学習ならびに表演のDVD・ビデオ・書籍の制作、マンチェスターにおける太極拳教室の開催、ヨーロッパ中でのセミナーの開催、例年の中国の学習旅行の企画運営を行っています。この教室のねらいは、太極拳のすべての側面にわたって、すべての学習者と研究者にとってアクセスしやすく価値のある理解を促進することです。

指導にあたるのは、2008年3月の時点では、L先生のほか2名のフルタイムの指導員、A先生とJ先生である。オールド・トラフォードの教室では金曜日と日曜日を除いて毎日指導が行われるが、ほかに、マンチェスター各地のスポーツ・クラブのカリキュラムに組み入れられた教室や、成人教育の慈善団体の主催する教室、そして、年配者の福利厚生のための慈善団体の主催する教室にも指導員を派遣している。L先生によれば、これらの教室をすべて含めると、2007年6月の時点で、Cセンターには全体で約2,000人の生徒がいる。そのうち、L先生が直接教えたのは約1,000人で、オールド・トラフォードの教室に通っているのは200人から300人である<sup>3)</sup>。

生徒の年齢と性別は、オールド・トラフォードの教室とそれ以外で大きく異なっている。オールド・トラフォードの教室は、生徒のほとんどが男性で、年齢層は20代から60代までほぼ偏りなくそろっている。それに対し、各地のスポーツ・クラブや慈善団体の教室では、生徒のほとんどが女性で、年齢層は中高齢に偏っている。また、生徒のエスニシティは、オールド・トラフォードの教室でもそれ以外でも、多くが白人で、中東系、インド系、中国系などのエスニック・マイノリティは比較的少数である。L先生によれば、中国人の生徒が少ないのは、中国人の多くは仕事か勉強で忙しいため、太極拳のような「ライフスタイルのこと」に手を出す余裕がないからだという。また、中国人はレストランやテイクアウェイ(弁当屋)で働いて

いる場合が多く、夜は仕事で忙しいことも、中国人生徒が少ない理由のひとつである。

指導料は、ほとんどのクラスが一回 50 分で 6 ポンドである。支払い方法は、現金あるいは小切手を教室で手渡しする方法と、事前にウェブサイトでカードを使って支払う方法がある。何回分かのクラスをまとめて購入すれば割引になる回数券制度と、ターム（春夏秋冬の各四半期）の間どのクラスでも自由に参加できるターム・チケットの制度もあるが、生徒の多くはクラスのたびに 6 ポンドを現金で手渡ししている。指導料をまとめて前払いしたり、練習に先立ってユニフォームや用具を購入したりする必要がないため、初心者が練習に参加するための敷居は低いといえる。

参与観察を行ったのは、のべ 16 ヶ月（2006 年 1 月～3 月、2007 年 1 月～2008 年 3 月）で、オールド・トラフォードの教室の火曜日と木曜日の夜のクラスに参加した。火曜日のクラスは、7:00～7:50 に行われる太極拳基礎クラス（初心者向け）と、8:00～9:50 にクラス二回分の時間をかけて行われる 83 式の型クラス（中上級者向け）である。木曜日のクラスは、7:00～7:50 に行われる 11 式の型クラス（初心者向け）、8:00～8:50 に行われる推手クラス（すべてのレベル向け）、9:00～9:50 に行われる気功クラス（すべてのレベル向け）である<sup>4)</sup>。各クラスの参加者は、少ないときで 5 人程度、多いときで 20 人程度になる。

L 先生は 40 代の中肉中背の男性で、眼鏡をかけている。オールド・トラフォードの教室の夜のクラスを担当するのは L 先生のほか、中国武術協会の審査では 4 段、C センター独自の指導者資格審査では 5 段の認定を受けている中東系の指導員の A 先生がいる。クラスの雰囲気は和気藹々としており、L 先生はいつもにこやかで、よく冗談を言う。

### 3 太極拳の社会的位置

C センターはどのような社会的位置を占めているのだろうか。ここでは、ウェブサイト・教室の空間・諸活動の三つの側面に認められる社会的位置の表現を手がかりにこれを考察したい。

#### 3-1 ウェブサイト

C センターのインターネット・ウェブサイトでは、C センターで練習されている身体技法の社会的位置についての言及が繰り返しなされている。その一例は、トップページに張られた「太極拳とは何か？」というリンクを辿った先のページにある、次の文章に認めることができる。

太極拳とは何か？

太極拳はダイナミックな一連の動作であり、柔と剛、急と緩を、『易経』における哲学

的かつ道教的な陰陽原理に従い、バランスの取れた自然なやり方で組み合わせたものである。その範疇には、螺旋、回転、独自の纏糸勁（てんしけい、Chansijin, Silk Reeling Energy）の動作、跳躍、飛躍、そして爆発的な発勁（はっけい、Fajin, Energy Release）を含む。

練習中は、身体は意識とともにリラックスしたままで、呼吸と動作はすべて密接に関連しつづける。これらの独自の特徴のために、健康、フィットネス、減量のための効果はいっそうすぐれたものになっている。これらは、年齢やフィットネスの程度を問わず、現在世界中の数多くの人々が習慣的に陳式太極拳を練習している理由の一部である。

陳式太極拳は創始されて以来、当初の意味と実践的応用に忠実でありつづけてきた。これは、陳家の現在の長である Z 先生が、太極拳の最高レベルの師範の一人として国際的に認められていることに示されている。

この文章では、C センターで練習されている身体技法が占めている社会的な位置が、次の三通りの方法で表現されている。

第一に、『易経』の「哲学的かつ道教的な陰陽原理」にもとづき動作が組み合わされているという記述は、C センターの身体技法が中国の文化的伝統を継承するものであることを示している。

第二に、「世界中の数多くの人々が習慣的に陳式太極拳を練習している」という記述は、C センターの身体技法が国際的に普及していることを示している。

第三に、「陳家の現在の長である Z 先生が、太極拳の最高レベルの師範の一人として国際的に認められている」という記述は、C センターの身体技法が、陳家に代表される太極拳の正統を継承するものであると同時に、現代の国際社会の認知を受けたものであることを示している。

指導されている身体技法についての記述のみならず、これを指導する L 先生についての記述からも、C センターの社会的な位置を読み取ることができる。ウェブサイトのトップページの左側には指導員の名前がリストされており、それぞれの名前から指導員を紹介するページへのリンクが張られている。リストの最上部にある L 先生の名前にリンクされているページには、次の文章がある。

L 先生は子供時代の 1972 年に中国で小林武術（しょうりんぶじゅつ、Shaolin martial arts）の練習を始めた。その 11 年後に、かの陳家溝出身で太極拳を学ぶ若者の技に感銘を受けて以来、陳家溝の第 11 世伝人たちの教えのもと正統の陳式太極拳を学ぶことで内家拳を理解するための道を歩み始めた。

中国でもっとも技に長け、経験も豊かな太極拳の指導者たちに教えを受け、また、南岳山（なんがくさん、Nanyue Mountain）の寺院の指導者たちには内気功（ないきこう、

Internal Qigong) を深く学んだのち、L 先生は中国本土からイギリスに移り 1995 年に C センターを創設した。

1982 年以來、L 先生は数多くの生徒たちが自分で道を歩み始めるための手助けをしてきた。現在は、ヨーロッパ中でセミナーを開き指導者を養成すること、また、太極拳を学ぶための本・DVD・ビデオを制作することに時間を費やしている。L 先生はすべての学習者と研究者にとってアクセスしやすく価値のある指導を通して、太極拳の原理と哲学の理解を深めるための手助けをしてきた。

L 先生は中国政府公認の中国武術協会に 7 段の認定を受けている。

C センターにおける指導に加えて、L 先生はエージ・コンサーン（年配者の福利厚生のための英国最大の慈善団体）、ワーカーズ・エジュケーション・アソシエーション（成人教育のための英国最大の慈善団体）、そして、数多くの私企業でも太極拳を教えている。また、サルフォード大学講師として太極拳を教えた経験も持つ。

この文章のなかで、L 先生の社会的位置をもっとも客観的に表現しているのは、L 先生が「中国政府公認の中国武術協会に 7 段の認定を受けている」という資格についての記述である。だが、L 先生が太極拳を学んだり教えたりした対象も、L 先生の社会的位置を表現するものとして資格に劣らず重要である。

L 先生が太極拳を学んだ対象としては、「陳家溝の第 11 世伝人たち」があげられている。陳家溝とは、すでに述べたように陳式太極拳の発祥地であり、第 11 世伝人はその正式な伝統の担い手である<sup>5)</sup>。そのため、この記述は、L 先生が太極拳の正統を継承していることを示している。

L 先生が内気功を学んだ「南岳山」は、湖南省衡山県に位置し、中国五大名山のひとつに数えられるが、数多くの大寺院を擁することでも知られる<sup>6)</sup>。そのため、L 先生がそこで気功を学んだという記述は、L 先生が気功の正統を継承していることを示している。

L 先生が太極拳を教えた対象としては、「C センター」に加えて、「エージ・コンサーン」、「ワーカーズ・エジュケーション・アソシエーション」、「数多くの私企業」、「サルフォード大学」があげられる。これらの団体で L 先生が太極拳を教えたという記述は、L 先生がこれら数多くの団体に認められていることを示している。また、特定の団体についての記述ではないものの、L 先生が「ヨーロッパ中でセミナーを開き指導者を養成」しているという記述は、L 先生を認める人々がヨーロッパにも散在することを示している。

### 3-2 教室の空間

オールド・トラフォードの教室の空間にも、C センターの身体技法の社会的位置を示す手が



図2 教室での練習風景

かりが数多く認められる。この教室は、中国人が経営する東洋医学の診療所が所有している建物の一部を借りて使用している。教室の入り口は診療所の入り口とは別で、横道に面しているが、通りに面したフェンスに教室を示す大きな垂れ幕が結び付けてあるためによく目立つ。垂れ幕には、赤地に黄文字で「C Tai Chi Centre」<sup>7)</sup>と印刷され、中央には太極図をモチーフにしたセンターのロゴマークが印刷されている。教室の入り口のドアの横には、縦長の垂れ幕があり、そこには大きく引き伸ばしたL先生の写真とCセンターの連絡先が印刷されている。写真は、太極拳表演のための伝統的な正装であるゆったりした上下を着たL先生が、岩の上で座って瞑想しているものである。垂れ幕はいずれもカラー印刷の美しいものである。

教室は、25畳ぐらいの広さがある長方形の部屋である。入り口のドアを入れてまっさきに目に付くのは、正面の壁の大きな垂れ幕である。教室の外のフェンスに結んであったものと同様に、赤地に黄文字で上段には「C太極中心」と「C Tai Chi Centre U. K.」の文字が、下段には「弘揚太極、造福人類」と「Promoting Tai Chi to its full potential」の文字が印刷されている。垂れ幕の横には、入り口の横にあったものと同じ大きさの縦長の垂れ幕が左右に2枚ずつ貼ってある。印刷されている写真はL先生のもののほか、L先生の先生にあたるZ先生、G先生のものがある(図2)。

垂れ幕と向かい合う後ろの壁には大きな横長の掲示板があり、そこには中国旅行やヨーロッパ各地でのセミナーで撮影された記念写真や、L先生やCセンターが取材を受けた新聞や雑

誌の記事，そして，生徒への連絡事項を書いた紙が貼ってある。また，Z先生がCセンターの名誉会長に就任した旨を記した飾り額と，L先生を含めた3名の指導員が中国武術協会に認定された段位の証明書のコピーも掲示されている。

教室の一番奥の壁には，開催予定のセミナーの参加希望者が名前を書いて予約するためのホワイトボードが掛けてある。また，すべての壁に，様々な中国の書画が掛けられている。鍾馗の墨絵，「友情」・「一帆風順」・「弘揚太極」の書などがある。

教室の奥の隅には白磁の観音像をのせた棚が吊っており，その下には祭壇がある。観音像にはいつも線香と蠟燭そして果物と生花が供えられている。その隅の床には，練習用の剣と槍がたくさん積み重ねて置かれている。

手前の隅にはテレビをのせた棚が吊っており，その下には机が置かれている。そこには，練習中に中国音楽のBGMを流すためのCDラジカセのほかに，ウェブページからリンクしているオンラインショップで販売している書籍・DVD・絵葉書・カレンダーなどの見本が置いてある。また，Cセンターが開催するイベントのパンフレットも並べられている。

ここまで紹介してきたように，Cセンターの教室の空間には，ウェブサイトにも劣らぬほど，Cセンターの身体技法の社会的位置を表現する事物があふれている。

第一に，中国の伝統的な慶事の色彩である赤地に黄文字で，中国語と英語が併記された教室の内外の垂れ幕・ロゴマークの太極図・伝統的な正装をした指導者の写真・中国の書画・観音像と祭壇・中国音楽のBGMは，すべて，Cセンターが中国の文化的伝統を継承していることを示している。

第二に，壁に掲示してあるメディアの紹介記事やヨーロッパ各地でのセミナーの記念写真は，Cセンターの身体技法が現代の国際社会において広く認知され普及していることを示している。

第三に，中国旅行の写真やZ先生の名誉会長就任の飾り額は，Cセンターと太極拳の正統との結びつきの緊密さを示している。指導員たちの段位の認定証も，Cセンターの身体技法と太極拳の正統との結び付きを示すものだといえる。

### 3-3 諸活動

すでに述べたように，Cセンターでは毎週のクラスのほかにも様々な活動が行われている。これらの活動も，ウェブサイトや教室の空間と同様にCセンターの社会的位置を表現するものであるが，とりわけ重要なのはZ先生をめぐる諸活動である。というのも，Z先生は，L先生が教えを受けた先生であるのみならず，陳式太極拳の現在の最高権威者の一人であるため，Z先生との関係が緊密であることは，Cセンターの身体技法が太極拳の正統を継承していることを強く示すからである。

Z先生との関係を示す活動として第一にあげられるのが，Z先生をマンチェスターに招聘し

で行われる特別セミナーである。2003年に、Z先生がCセンターの名誉会長に就任したことも、この延長線上の出来事として位置づけることができる。

また、L先生は2005年に、Z先生の著書『太極養生功』を英訳して*Tai Chi for Health*として出版した。この本は、太極拳の哲学と歴史の説明にはじまり、基礎体操と18式の型を図解入りで説明したもので、もとは2002年に中国語と英語の二言語併記版として中国で出版された。だが、英訳のレベルはあまり高くなく、中国語の意味を十分に伝えきれていなかった。

L先生は、自分の生徒たちの協力を得て自然で明瞭な英訳をしたうえ、英語圏の太極拳の学習者に特有の質問に答えるための章をいくつか新たに追加した。また、英語圏の太極拳の学習者の体験記やインタビュー記事も追加し、動作を図解する写真をすべて高解像度カラーで撮影しなおしたうえ、新たに数多くの写真を追加した。

出来上がった本は、B5版で208ページ、全ページカラー印刷の豪華なもので、初版は5,000部（ハードカバー2,000部、ソフトカバー3,000部）である。表紙を飾るのはZ先生、見返しにはL先生の紹介があり、口絵には、Z先生とL先生がともに練習したり、世界各地で指導したりしている写真が数多く掲載されている。

Cセンターの身体技法が、Z先生に象徴される太極拳の正統に限らず、中国の文化的伝統全般と結び付いていることを示す活動として中国旅行がある。この旅行は、毎年8月に18日間程度の日程で行われるもので、Cセンターの目玉行事のひとつである。行程としては、陳家溝・少林寺・南岳山などでの太極拳や気功の練習のほか、北京で開催される中国武術協会の段位認定会も組み込まれることがある。

### 3-4 まとめ

ここまでの考察をまとめると、Cセンターは、中国の文化的伝統の継承・太極拳の正統の継承・現代の国際的な認知と普及という三つの社会的文脈に位置づけられ、これらの交点がCセンターの身体技法の社会的位置を構成しているといえる<sup>8)</sup>。

Cセンターの社会的位置がこのように規定されているとき、Cセンターの身体技法を習得することは、この社会的位置がそのまま身体に刻印されることになってしまわないのだろうか。

## 4 各クラスの練習の概要

Cセンターの身体技法を習得することでその社会的位置が身体に刻印されるか否かを考察するに先立って、社会的位置が具体的にどのように身体技法に反映されているかを考察せねばならない。そのために、ここではCセンターの各クラスの概要を紹介することにしたい。

すでに述べたように、クラスには四種類あり、太極拳基礎クラス (Tai Chi Foundation)、型

クラス（Forms）、推手クラス（すいしゅ、Push Hands）、気功クラス（Qigong）に分かれているが、いくつかのクラスに共通する要素も存在する。

#### 4-1 クラスの共通要素

##### ・準備体操

すべてのクラスに共通して、最初に10分程度をかけて準備体操が行われる。先生は教室の前に生徒たちを向いて立ち、生徒たちは1～3列に横に並んで先生の指示に従いつつ、その動作を模倣する。体操の一連の動作は、手首や足首や腰を回したり、膝を屈伸させたりする一般的な体操の動作を恣意的に組み合わせたもののように見えるが、実際は、Z先生の著書 *Tai Chi for Health* にも掲載されている標準化された一連の動作を行っている。準備体操のあと、それぞれのクラスの練習に移る。

##### ・型

先生は教室の前に生徒たちに背中を向けて立ち、型の動作を行う。生徒たちは先生の後ろに1～3列に横に並んで、先生の動作を模倣する。最初は動作を止めながらゆっくりと行い、2回、3回と繰り返すうちになめらかな速い動きで行うようになる。途中で先生が動作を止めつつ、生徒たち全員に「そこで止める」と言うことがある。生徒たちが動作を止めて、そのままの姿勢を保っているなかを先生が歩き回り、一人ひとりの姿勢を直す。この練習は、立つ姿勢こそ異なるが站樁と似ている。

Cセンターで通常練習される型は、83式（83 Form）と11式（11 Form）の二種類がある。型の名前の数字は含まれる技の数を表している。83式は、正式には「新架（しんか、Xinjia, New Frame）83式」と呼ばれ、陳家に伝承された動作にもとづき陳発科が20世紀中葉に完成したとされる伝統的なものである。11式は、新架の創造以前から陳家に伝承されていたとされる「老架（ろうか、Laojia, Old Frame）83式」をもとに、あまり練習時間が取れない生徒を念頭においてL先生が創造したものである。

##### ・気功

準備体操のときと同じように先生と生徒が向き合って並ぶが、行われるのは気功の動作である。呼吸に合わせて両腕をゆっくり上げ下げすることを中心としているが、両手を上げた姿勢、手のひらを胸の前で合わせた姿勢、あるいは、両手で独特の印を結んだ姿勢で、しばらくじっとしていることがある。この印は中国の仏教式気功に伝統的なものである。

・站樁

各クラスの途中で、站樁（たんとう、Zhanzhuang, Tai Chi Stance）と呼ばれる練習を行う。これは、ひざを軽く曲げて腰を落とし、肘を軽く曲げたまま両手を肩の高さに上げて、そのままの姿勢でしばらく立っている伝統的な練習方法である。先生は立ち方の手本を見せたのち、生徒の姿勢を一人ずつ直して回る。そのとき先生は、手で生徒の身体に触れて直接手足や腰の位置を直すこともあれば、「頭をまっすぐに、肩はリラックスして」など口頭で指示を出すこともある（図3）。

站樁は、最古の中国武術流派のひとつである形意拳をもとに1925年に意拳を創始した王薊齋（おう こうさい、Wang Xiangzhai）が完成させた練習方法である。王は1950年代より病氣治療のための気功として站樁を医療機関で指導し始めたが、その効果が着目され、太極拳をはじめとする各種の武術や気功の流派に取り入れられるようになった。

・感覚の確認

L先生はすべてのクラスで、生徒たち全員に向かって、「どんな感じがしますか」と感覚を尋ねる。ほとんどの場合はクラスの最後に生徒全員を順に指名して感想を聞くが、時間があまり残っていない場合や、ひとつのクラスで站樁を二回以上練習したときは、一部の生徒だけを指名することもある。生徒たちは、「良い感じだった」・「リラックスした」など、漠然とした



図3 站樁の練習で生徒の姿勢を直すL先生

感想を言うこともあれば、「指先がむずむずするのを感じる」・「左足が引きつった感じだ」・「脚が燃えるようだ」など具体的に答えることもある。また、「エネルギー」や「エネルギーのレベル」に言及する場合もある。

#### 4-2 クラスごとの練習内容

##### ・太極拳基礎クラス

準備体操に続けて、纏糸勁（てんしけい, Chansijin, Silk Reeling Energy）の動作を練習する。これは、身体全体を連動させながら円を描くように腕を回転させる運動である。その場で静止したまま行う場合もあれば、移動しながら行う場合もある。続いて站樁と気功を行うが、初心者が多いので站樁で立つ時間は5分以下である。最後に感覚の確認が行われる。

##### ・型クラス

木曜日の11式の型クラスでは、準備体操に続けて、型、站樁、気功の順で練習が行われ、最後に生徒たちの感覚が確認される。火曜日の83式の型クラスでは、休憩をはさんで同じルーチンが繰り返される。11式の型クラスは初心者が多いので、型の姿勢を止めたまままでの時間や、站樁で立つ時間は5分以下であるが、火曜日の中上級者向けの83式の型クラスでは10分以上のことが多い。立つ時間が長くなる理由のひとつは、先生がそれぞれの生徒の姿勢を直すのにかける時間が長いためである。

##### ・推手クラス

準備体操が終わると、生徒全員が相手をさがして二人一組になって向かい合って立ち、手首を接触させたまま決められた動作を行う。最初は片手だけを接触させ、接点が円を描くように動くが、練習が進んでくると両手を使って相手の腕をつかんだり引っ張ったりする複雑な動きになる。先生は歩き回って生徒の動きを直すか、二人組で練習している生徒の一人と交代して手本を見せることもある。決められた動作の推手のあとで、自由に動いて相手を倒そうとする推手が行われることもある。自由の推手は、足を動かさない約束で行われる場合と、自由に移動してよい場合の二種類がある。最後には気功を練習する。感覚の確認が行われる場合もあるが、常に行われるわけではない。

##### ・気功クラス

準備体操ののち、気功と站樁を練習する。気功は、各クラスに共通した基本の動作のほか、気功のクラスだけの動作もいくつか練習する。初心者が多いため、站樁の時間は5分以下である。站樁に続いて感覚の確認が行われる。このクラスの途中で、全員が車座になって座り、瞑

想する場合がある。そのさい、先生が「Na Mo Guan Shi Yin Pu Sa (南無観世音菩薩)」ないし「A Ma Ni Ba Mi Hong」と唱え始めると、生徒たちもそれに合わせて同じ言葉を唱える。この文句は、中国の仏教式気功で伝統的に唱えられるものである。瞑想がある場合もない場合も、最後に再び感覚の確認が行われる。

#### 4-3 まとめ

準備体操・型・気功・站椿・推手などの練習の種類を問わず、各クラスで習得されるべき動作と姿勢は、すべて太極拳と気功の正統を継承したものである。そのため、Cセンターにおいて習得されるべき身体技法は、Cセンターの社会的位置を規定する三つの文脈のうち、太極拳と気功の正統を高度に反映しているといえる。

それに比較して、他の二つの文脈、つまり、中国の歴史的伝統の継承と、現代の国際的な認知と普及という文脈は、Cセンターの身体技法のありように直接的には反映されていない。これらの文脈は、太極拳と気功の正統という文脈に重なり合う限りにおいて、Cセンターの身体技法に反映されているといえるだろう。

しかし、Cセンターの身体技法が太極拳と気功の正統の継承という社会的位置を反映しているだけでも、これを習得した身体が、この社会的位置の刻印を受けることを意味するのではないだろうか。とりわけ、各クラスの練習において要求されるのが、先生の動作と姿勢のきわめて厳密な模倣であることを踏まえたなら、Cセンターの身体技法を習得することが、太極拳と気功の正統を、文字通りに身体に刻印することであるという視点が妥当であるかに見える。

## 5 身体の抵抗

ここでは、インタビューした生徒12人から、上級者・中級者・初級者の代表として3名を取り上げることで、Cセンターの身体技法の習得が、Cセンターの社会的位置の刻印を身体が一方的に受けることであるか否かを検討したい。具体的には、次の三点に焦点を当てることにする。

第一に、生徒がいかにしてCセンターの練習に参加しはじめ、身体技法の習得を開始したかに焦点を当てる。はたして、生徒の動機はすべてCセンターの社会的位置に還元できるのだろうか。それとも、モースの威光模倣におけるように、L先生の行為に社会的位置に還元できない有効性を認めることで模倣が開始されたのだろうか。

第二に、実践における生徒の認知がどのように変化するかに焦点を当てる。はたして、ハビトゥスの規則化におけるように、行為者の認知は社会的位置の一方的な刻印の産物なのだろうか。それとも、身体を刻印しようとする社会的位置と、それに抵抗しようとする身体のせめぎ

あいの産物なのだろうか。

第三に、生徒の主体性のありようの変化に焦点を当てる。はたして、行為者の主体性は、練習における規律＝訓練を介した主体化＝従属化の産物なのだろうか。それとも、練習における規律＝訓練が身体の抵抗のために失敗し、そのために主体化＝従属化が達成されないことはありうるのだろうか。

### 5-1 Bさんの場合

上級者の代表として取り上げるのは、30代の中国系の男性であり、中国武術協会に5段を認定されているBさんである<sup>9)</sup>。Bさんは、1998年からCセンターで練習しており、常連の生徒のなかでは最古参であったが、2008年1月からあまり練習に顔を出さなくなった。

BさんがCセンターの練習に参加するようになった理由としては、第一に、大学でサッカーとホッケーを激しく練習して、膝を痛めてしまったためである。これをきっかけに、「粗野な力、生の力」に頼らずに、一生かけて上達しつづけることができる運動がしたいと考えるようになったという。第二に、Bさんは詠春拳（えいしゅんけん、Wing Chun Kung Fu）・競技武術（Wushu）・空手の経験があったが、これらの武術の動作は「十分に流れていない」ように思えたためである<sup>10)</sup>。第三に、詠春拳・競技武術・空手のような武術を仮に10年練習して、30歳になったときに一定のレベルに達しても、その頃にはすでに体力的な衰えが始まっており、身に付けた技法を十分に活用できないことが予想できたためである。第四に、当時チャイナタウンにあったCセンターの見学に行くと、教室の壁にはグランドマスター（Grandmaster、宗家）の写真が2枚掛けられていたためである<sup>11)</sup>。これを見て、BさんはCセンターが「グランドマスターのいる武術」であり、とても正統で中国的なものに思えたという。第五に、L先生の動作を見たとき、他の太極拳の先生よりも本物の武術をやっているように見えたためである。「パンチをするときには、パンチをしたつもりになるんじゃなくて、本当にパンチをしていたんだ。」

これらの五つの理由のうち、太極拳の正統というCセンターの社会的位置に直接由来するものは第四の理由ひとつだけであり、他の四つはすべて、Bさんが自分の身体の抵抗を介してCセンターの身体技法の有効性を認識するという契機が含まれている。というのも、Cセンターの身体技法が、「粗野な力、生の力」に頼らない身体の使い方をするために有効であること・「流れている」動作をするために有効であること・30歳になっても有効であること・「本当にパンチ」をするために有効であることは、いずれも、今のままの自分の身体では意図しても実現できない有効性としてBさんが認識したものである。このような認識を経てCセンターに参加し、L先生の模倣を開始したことは、Cセンターの社会的位置に還元できない行為だといえる。

Bさんは、練習を開始してから2、3年経った頃に劇的な変化を経験した。彼はL先生に1年半習ったあと、専門職の訓練のためにマンチェスターを離れ、英国北西部各地で1年間修行しなければならなかった。その間、3、4ヶ月続けてホテルに滞在したとき、夜に一人だけの時間がたくさんあったので、気功と站椿を一日に2、3時間ずつ集中的に練習した。そのとき、Bさんは「はじめて本当の気の片鱗を味わった」。それは、次のような経験である。

最初に覚えているのは腹部の感覚だね。座っていると、なにか熱いものが上に動いたんだ。……何かつまっていたものが、泡が腹の中をボコボコと沸き立って上がっていったんだ。それで、これは驚くべきことだ、と思ってどんどん練習を続けていると、それが背中を紐のように上がっていったんだ。毎日練習するたびに、どんどん高く上がって行って、頂点を越えて今度は降りていったんだ。降りるのはかなり速かった。いちばんすごかったのは、このときだな。「ジュジュジュ」という擬音とともに、両手の指先が左右から近づいて先端が衝突する身振りをする。Bさんはおそらく、「任脈（にんみゃく、Renmai）」と「督脈（とくみゃく、Dumai）」が「会陰（えいん、Huiyin）」で結合する感覚を指しているのだと思われる<sup>12)</sup>。

—そこに特別な経穴があると聞いたことがあります。

あたかも、火が通り抜けるようだった。

—両側から。

両側から。はっきりした線が突き抜ける感覚、驚くべき感覚だよ。何かが起こっていると確信したよ。あの沸き立つような感覚を得てから、あの3、4ヶ月の練習の間に、それがまた始まったのさ。最初に感覚を得ると、もうそれがどんなものか説明してもらわないんだ。自分で経験したんだから、自分で練習を続けてゆけるのさ。最初の発見をしてすぐに、旅行の合間にL先生に連絡をとって、何が起こったか話すと、彼は、どんどん続けろ、どんどん続けろ、とだけ言うんだ。彼はいつもの練習中にも否定的なことは決して言わないんだけどね。2、3ヶ月の間、ただ、どんどん続けろ、どんどん続けろ、とだけね。それから1年ぐらいにわたって、体中の経絡（けいらく、Energy Channel）がボン、ボンと開いていったのさ。最後は、それが全身くまなく覆うようになった。でも、これは初心者には話してはいけないんだ。その感覚を求め出してしまうから。他方、僕は教室を離れて旅行をしていたから、より純正な経験をしたと思う。

Bさんは、この一連の経験を経て、「体中の経絡」に「エネルギー」が流れるのを四六時中たえず感じるようになったという——「僕は、ここにこうして座っている間も、それをずっと感じるんだ。」したがって、Bさんがこの経験で獲得した「体中の経絡」とは、身体を覆う感覚の持続的構造であるといえるだろう<sup>13)</sup>。

注目すべきは、Bさんの身体における感覚の持続的構造の形成が、Bさん自身の意思でも、L先生の意思でもコントロールできないものとして経験されたということである。Bさんは、太極拳と気功の正統に従うべく意図して練習していたが、最初に腹部に「なにか熱いものが上に動いた」感覚を得たのは、そのように意図したためではなかった。Bさんの意図にかかわらず、Bさんの身体がその感覚を生じさせたのである。同様に、その感覚が「背中を紐のように上がって」ゆくことや、「頂点を越えて今度は降りて」ゆくことも、意思の及ばないところで身体が生じさせた感覚なのである。Bさんの精神は、身体が次々と発生させる感覚を、ただ受動的に知覚しただけであるといえる。

L先生は、Bさんの感覚の報告を受けてから、そのつど「どンドン続けろ」というポジティブ・フィードバックを与えている。そのため、L先生は太極拳と気功の練習によって一般的に得られる感覚のうち、どれが望ましいものかを知っていたと考えられる。しかし、L先生は望ましい感覚を知っていても、これをBさんに直接に引き起こしたわけではなかった。L先生が行ったのは、第一に、太極拳と気功の正統に従って、Bさんに練習のための環境（Cセンターの教室の空間と指導など）と練習の動機づけ（教室の壁のグランドマスターの写真など）を提供することであり、第二に、Bさんの身体が練習のなかで感覚を生み出したあとで、太極拳と気功の正統に従ってこれに事後的な承認を与えることにすぎなかった。そのため、感覚が形成される核心的な部分には、L先生の意思は介入していないのである。

このように、太極拳と気功の正統の継承というCセンターの社会的位置は、Bさんの動機と環境、そして、L先生の指導と練習方法までは規定することはできても、練習におけるBさんの身体の感覚的構造の形成は規定することができなかつたといえる。したがって、この形成には、BさんとL先生の意思には還元できない、Bさんの身体の抵抗を認めることができるといえる。

意思に対する抵抗として形成された感覚の持続的構造は、形成されたのちも意志に抵抗しつづける。Bさんは感覚の持続的構造を獲得したあと、それまでの自分の動作と姿勢——Cセンターの社会的位置を内面化した自分自身そしてL先生の意思に規定された動作と姿勢——を、修正することを余儀なくされたという。なぜなら、身体各部の「エネルギー」の通りができるだけ良くなるように、「あたかも、水が縦穴を降りてゆくよう」に動いたなら、型の動作がおのずから変化してしまうからである。

姿勢をいろいろ動かしてみて、感覚がよりよくなる姿勢を探すんだ。そして、ある意味で、よりよく動くための姿勢は、普通は、もっともリラックスしていて、もっとも効率的な動作なんだ。どのみちね。全部ひとつに重なるのさ。間違っただ動作を正しく行うことはできない。正しい動作しか正しく行うことができない。ははは。本当に単純なことなんだ、そう思わないかい。

Bさんの現在の動作は、私がCセンターの参与観察で知りえたかぎり、実際に「もっともリラックスしていて、もっとも効率的」な動作にきわめて近いものである。というのも、Bさんの型はキレがあるうえ力強く、推手のさいにもBさんが負けることはほとんどないからである。私自身も、Bさんに推手の相手をしてもらったことが何度もあるが圧倒的な安定感と力強さの前にほとんど勝つことができない。

Bさんの経験からわかることは、Cセンターの指導において要求される動作や姿勢がどれほど厳密に規定されているかに見えても、こうした規定を身体に刻印することは、Cセンターの身体技法の習得にとって周縁的でしかないということである。本質をなすのは、こうした規定を逃れてしまう動作や姿勢のディテールを、意思に対する身体の抵抗として生み出された感覚の持続的構造によって規定することなのである。そのため、Cセンターの身体技法を習得することは、Cセンターの社会的位置の刻印を身体に受けることではないという逆説を認めることができる。

感覚の持続的構造が形成されたことで、Bさんは自分の身体の認知が変化するのを経験したが、それは同時に、他者の身体の認知が変化することでもあった。

相手の動きが自分の動きと同じだとわかるんだ。発勁のとき、腕をぱっと振り出すだろう、今は、それが内的な動作か外的な動作かをかなり簡単に見分けることができるんだ。どうやって説明すればいいかわからないけど、相手が正しい動きを身に付けているかどうかは、ただ経験でわかるんだ。僕はたくさんのマスターを見てきて、なかには何人かグランドマスターもいたけど、正しい動作とそうでない動作があったよ。ははは。

ここで言及されている「マスター」や「グランドマスター」が陳式太極拳の指導者とは限らないが、「グランドマスター」の動作にすら「正しい動作とそうでない動作」を認めるという認知のありようは、Bさんが最初にCセンターの教室を尋ねたときの認知のありよう——壁にかけられた2枚の写真を見て、この教室が「グランドマスターのいる武術」だから正当で中国的なはずだと判断した——とは対照的である。最初にCセンターを尋ねたとき、Bさんは太極拳の正統という社会的位置を示す2枚の写真を手がかりにCセンターの身体技法を認知

したが、現在のBさんは、対象の社会的位置よりも、むしろ、Bさん自身の身体感覚の持続的構造を手がかりにして身体技法を認知しているといえる。したがって、Cセンターの身体技法の習得過程におけるBさんの認知は、Cセンターの社会的位置がBさんの身体に刻印された産物としてではなく、Cセンターの社会的位置とBさんの感覚の持続的構造の動的なせめぎあいの産物として理解すべきである。

Bさんの認知のありようが示しているように、BさんはCセンターに従属した主体ではない。これは、彼が2008年1月から以前ほど頻繁に練習に来なくなった理由にうかがえる。彼によれば、自分が太極拳から得たいと思っていたものは、ひとまず全部得ることができたため、今年からは、人生における太極拳以外の側面にもっと力を入れるつもりであるが、全身の気の流れを維持するために必要な20分から30分程度の練習は毎日欠かさず自宅で行っており、今後も続けるつもりだという。これは、Bさんが、Cセンターにおける動作や姿勢の規定によって規律＝訓練された従順な身体を、内面化されたL先生の視線によって監視する主体ではなく、感覚の持続的構造を持つ身体を、この感覚に従って維持する主体であることを意味している。

## 5-2 Kさんの場合

中級者の代表として取り上げるのは、30代のインド系の男性であり、中国武術協会に2段を認定されているKさんである<sup>14)</sup>。Kさんは、2003年からCセンターで練習しており、現在よりも頻繁に練習に来る生徒の一人である。

KさんがCセンターの練習に参加するようになった理由としては、第一に、大学でキックボクシングをやってみたが、自分に合わなかったために他の武術を探していたためである。キックボクシングの指導は荒々しすぎ、また、比較的小柄なKさんは、自分よりずっと背の高い相手と対等にわたりあうことが難しかった。第二に、大学卒業後にマンチェスターに戻ったとき、友人のBさんにCセンターを紹介してもらったためである。第三に、スポーツ・センターで開かれているCセンターの教室に参加してみて、それが「一生やり続けることができるもの」だとわかったためである。

これらの三つの理由のうち、太極拳の正統の継承というCセンターの社会的位置に由来するものはひとつもなく、第一と第三の理由には身体の抵抗を介した身体技法の有効性の認識という契機が含まれている。というのも、Cセンターの身体技法がキックボクシングよりも自分の能力を生かすのに有効であり、また、一生続けるうえで有効であるという認識は、今のままの自分の身体では意図しても実現できない有効性としてKさんが認識したものだからである。

Kさんは、Cセンターで練習を開始してから1ヶ月程度経った頃、站樁をしているときに指先がむずむずするのを感じた。そのまま練習を続けていると、1年経った頃に劇的な体験をし

た。

L先生は僕に単鞭（たんべん、Single Whip、型を構成する動作のひとつ）の姿勢をさせたんだ。それで、僕はしばらくその姿勢をしていた。10、15分ぐらいかな。みんな動いたけど、僕はもっと長い間そのままとどまった。そこで、僕は突然エネルギーの急激な流れを感じたんだ。僕の力がボールのように感じているのを感じた。とてもとても強くて、あらゆるところにあるんだ。ほとんど、ひきつけを起こしたようだった。とても強い感覚だった。僕はそこでやめて、L先生に、これは何なのか聞いたんだ。彼は、ああ、君は経絡が開くのを感しているんだよ、エネルギーの経絡だね、詰まっている経絡を開くと、突然のエネルギーの急激な流れを感じるんだ、と言う。僕が感じているのはそれだと言うんだ。

ここでも、Bさんの場合と同様に、L先生は事前にどのような感覚を得るべきか説明せずに、Kさんの身体が気の感覚をもたらしたあとではじめて、「経絡が開くのを感しているんだよ」とポジティブ・フィードバックを与えている。

しかし、L先生のフィードバックを受けたにもかかわらず、Kさんは「僕にはまだいくつかの（経絡の）詰まりがある」と認識している。その根拠は、次のようなものである。

それが分かるひとつの方法は、站樁をしているときに、こちら側（右側）の指が、反対側の指よりも冷たく感じるんだ。それでこちら側（左側）には、太極拳をやっているときに肌に赤い模様が見えるだろう、それがエネルギーなんだ、それがこちら側（右側）よりもこちら側（左側）のほうに多いんだ。次に練習するときに見せてあげるけど、しばらくやったあとで、こうすると（両手を合わせる）こちら側（右側）がいつもより冷たくて、こちら側（左側）がいつもより暖かいんだ。……それに、時には両手のそれぞれの指で、一本が冷たくて別のが暖かいことがある。

身体の右側における経絡の詰まりを裏付ける事実として、Kさんは、子供の頃に腎臓が弱かったとき、身体の右側に水が溜まる症状が出やすかったこと、そして、スポーツをするさいに、身体の右側にケガをしやすかったことをあげている。このように、自分の身体における熱の偏りの感覚的構造・症状の出やすさの偏りの構造・ケガの偏りの構造を手がかりにして、Kさんは、L先生のポジティブ・フィードバックにもかかわらず、自分の身体に残る経絡の詰まりを認知しているといえる。これは、Kさんの認知が、太極拳の正統という社会的位置を占めるL先生の指導によって直接規定されるのではなく、L先生の指導とKさんの身体に発生した諸構造のせめぎあいの産物であることを意味している。

また、Kさんは、経絡の詰まりがなくなれば、自分の型の動作がよりよいものになることを認識している。

L先生がいつも話して、Bさんがいつも話しているのは、エネルギーを全身に感じると、動きが良くなるというんだ。良い基礎があれば。なぜなら、エネルギーの流れとともに動いているから。それがコントロールできなかつたり、エネルギーを感じられなかつたりすると、型はただ反復によってやっているだけなんだ。……僕は自分のエネルギーの流れがあまり良いとは思わない。相対的にね、L先生や誰かと比べて。Bさんとかね。彼らが型をやるときには、彼らがエネルギーの動きを通して動いていることが僕にはわかる。いっぽうで、僕が動いているときには、少し、僕は反復で動こうとしているんだ。ある意味でね。……僕は、ある感じ方をすべきだということを自覚しているし、また、今はそのような感じ方をしていないことも自覚している。それで、僕がそのように感じたときには、僕はそれをわかると思う。僕がもっとエネルギーの流れに従って動いたときにはそれがわかると思うんだ。

ここで、Kさんは、「エネルギーの流れとともに動いている」動作と、「反復によってやっている」動作を区別して、L先生そしてBさんの動作を前者に、自分の動作を後者に位置づけている。後者が、太極拳の正統としての身体技法が要求する動作や姿勢を身体に刻印することで生み出された動作であるのに対し、前者は、こうした要求では規定されていない動作や姿勢の微細なディテールを、身体に発生した感覚の持続的構造が規定することによって生み出された動作であるといえる。

Kさんが、「少し、僕は反復で動こうとしている」ことを認識することができたのは、練習を開始して1年後にKさんが経験した「エネルギーの急激な流れ」の感覚は、動作のディテールを規定できるほど持続的な構造を持っておらず、また、Kさんの身体の持続的な諸構造——熱の偏りの構造・症状の偏りの構造・ケガの偏りの構造——も同様に、動作のディテールを規定するものではないためであると考えられる。このように、身体感覚が動作のありようを十分に規定できないことが認識されたとき、動作のありようは、もっぱらL先生の指導によって社会的に規定されたものとして認識されるはずである。

しかし、Kさんの身体感覚は、動作のディテールを規定することはできなくとも、この動作をKさんが知覚するための基準として機能している。つまり、Kさんは自分の動作をL先生の指導によって社会的に規定されたものとして外側から知覚するのみならず、自分の身体の構造では十分に規定できないものとして内側からも知覚しているのである。このように、身体の抵抗を介した内側からの認知があってこそ、Kさんは、将来において「もっとエネルギー

の流れに従って動いたときにはそれがわかると思う」と予測することができるのである。

### 5-3 Cさんの場合

初心者の代表として取り上げるのは、40代の中国系の女性であるCさんである<sup>15)</sup>。Cさんは、2006年からCセンターの火曜日の83式の型クラスに参加している。

CさんがCセンターの練習に参加するようになった理由としては、第一に、それまで3、4年間参加していたテコンドーのクラスに若者たちが増えて、彼らとスパーリングするには自分は「歳を取りすぎている」ためである。第二に、友人にCセンターの83式の型クラスを紹介してもらったこと。第三に、健康を維持して、動き回る能力や身体の柔軟性を保つために、太極拳は良さそうに思えたこと。第四に、L先生が中国の文化的伝統のなかで育ち、また、太極拳の正統を継承していること。

したがって、Cさんが練習に参加するようになった四つの理由のうち、太極拳の正統と連続しているというCセンターの社会的位置に由来するものは第四の理由だけである。そして、第一と第三の理由には、Cさんによる自分の身体の抵抗を介したCセンターの身体技法の有効性の認識という契機が含まれているといえる。そのため、CさんがCセンターに参加した動機は、Cセンターの社会的位置に還元することができない。

Cセンターで練習を開始してから、Cさんは身体や認識の劇的な変化を経験していない。

— 太極拳の練習を始めてから身体に変化を感じましたか。

うーん、特にこれといった感じはないわね。ただ、体の柔軟性を維持したりとかね。夜にただ座ってテレビを見ているのはよくないと思ってるのよ。ははは。

— 太極拳ではよく、気(き, Chi)とか丹田(たんでん, Dantian)とかの感覚について言われますよね。

それについては考えたことがないわ。ただ、その感覚は自然に来ると思うの。だから、意図的に気を感じようとかはしていないわ。だから、L先生が私のところに来て何か感じるか聞いても、私はただやるべき動作をやっているだけなのよ、もし感覚が来るときは来るというだけね。ははは。

社会的位置の規定を逃れる動作や姿勢のディテールを、身体の感覚的構造に依拠してみずから規定しつつ型を行っているBさんや、同じことを行おうと努力しているKさんの身体と比

較して、「ただやるべき動作をやっているだけ」のCさんの身体には、Cセンターの社会的位置によって規定された動作と姿勢が一方的に刻印されているかに見える。

しかし、Cさんが参加している83式の型クラスでは、L先生による感覚の確認が前半と後半でそれぞれ一回ずつ行われており、そのたびに、多くの生徒が練習中に発生した感覚を語っていることを踏まえたなら、何も特別な感覚はないということ自体が、社会構造の刻印に対するCさんの身体の抵抗を示していないだろうか。身体の抵抗がどれほど頑強なものであるかは、次の引用が示している。

— L先生が練習の最後に感覚を尋ねるのをどう思いますか。

そうね、私は何も感じなかったと言うわ。なぜかって、いつも同じことだからよ。手を下げると血が流れるのを感じるわ、それだけなのよ。しばらくこうして手を上げているとむずむずする感じもあるだろうけど、あまり気にしないの。自然にしているのがいいと思うから。

— それで、L先生がみんなに感覚を尋ねるのを役に立つとか面白いとか思いますか。

もちろん、感覚についてみんなが話しているのを聞くのは面白いわ。わあ、って。ははは。私はそんなのは感じないわ。みんなが感じているのはたぶん本当だろうけど……。

Cさんは、感覚の語りに影響されて何かを感じたつもりになることと、身体によって具体的な構造を持つ感覚が生み出されることを截然と区別し、自分の目標を後者に定めていることがわかる。この区別が可能だったのは、「手を下げると血が流れるのを感じる」ことが知覚できることから読み取れるように、Cさんが自分の身体感覚を特定することができ、また、この感覚が持続的構造をなしていないことを知覚できたからである。

感覚の語りと実際の感覚の齟齬は、感覚のあるべき位置を正確に指示する東洋医学の述語を使用しても消し去ることはできない。CさんもL先生も中国語（普通語と広東語）を話すため、L先生はクラスでCさんに指導したり感覚を尋ねたりするときだけ、英語ではなく中国語を用いることが多い。Cさんによれば、L先生は主要な経絡のひとつである「督脈（とくみゃく、Dumai）」や、経穴の「百会（ひゃくえ、Baihui）」と「会陰（えいん、Huiyin）」にも言及したことがあるという<sup>16)</sup>。しかし、Cさんは、次のように述べる。

彼（L先生）は特定の言葉を話すときには中国語で話すから、私はたぶん彼が何を言って

いるかは理解できるわ……でも、どんなふうなのかは想像できないわ。ははは。

身体が社会的な意味づけに従って変形させられる可塑的な素材にすぎないならば、L先生の言葉を「理解」できても、「どんなふうなのかは想像できない」という齟齬は発生しようがないはずである。この齟齬が可能なのは、身体に付与される社会的意味の構造とは独立に、Cさんの身体感覚が存在し、両者が矛盾しうるからである。つまり、Cさんは、L先生の指導が構築する身体の社会的意味と、自分自身の身体感覚を重ね合わせたとき、前者において明瞭に弁別された要素である「督脈」・「百会」・「会陰」に対応するほど明瞭に弁別された要素を後者に感じるができなかったのである。この状態を、Cさんは、L先生の言葉を「理解」はできるが「想像」はできないと表現したと思われる。

#### 5-4 まとめ

Cセンターは太極拳の正統という社会的位置を占めているにもかかわらず、Cセンターの身体技法を習得することはその社会的位置の刻印を身体が一方的に受けることではないという逆説は、次の三点から確認することができた。

第一に、生徒がCセンターの練習に参加した動機には、生徒によるCセンターの社会的位置の認識という契機のみならず、Cセンターの社会的位置に還元できない契機——生徒自身の身体の抵抗を介したCセンターの身体技法の有効性の認識——が認められた。

生徒たちが認識した具体的な有効性は、大きく二種類に分けることができるだろう。それは第一に、それまでに経験した武術——Bさんの詠春拳・競技武術・空手、Kさんのキックボクシング、Cさんのテコンドー——では得られない有効性である。そして第二に、特定の身体の使い方——Bさんのいう「粗野な力、生の力」に頼らない運動・「流れている」動作・「本当にパンチをしている」動作、Kさんのいう「一生やり続けることができる」運動、Cさんのいう「健康を維持」する運動——をするための有効性である。これら二種類の有効性は、いずれも、自分の現在の身体のありようでは実現しようとしてもできない有効性として、つまり、身体の抵抗を介して認識された点で共通している。

第二に、練習における生徒の認知は、Cセンターの社会的位置の身体に対する一方的な刻印によって形成されたものではなく、身体を刻印しようとするCセンターの社会的位置と、それに抵抗する身体のせめぎあいの産物であった。

このせめぎあいの具体例としては、第一に、Cセンターの身体技法に対するBさんの認知が、グランドマスターに象徴されるCセンターの社会的位置に規定されたものから、Bさんの身体に形成された経絡の感覚の持続的構造に規定されたものに変化したことが挙げられる。第二に、自分の身体や動作についてのKさんの認知が、L先生によるポジティブ・フィード

バックによって直接規定されるのではなく、Kさん自身の身体の諸構造——「エネルギーの急激な流れ」の感覚・熱の偏りの構造・症状の偏りの構造・ケガの偏りの構造——によって媒介されていることが挙げられる。第三に、「督脈」・「百会」・「会陰」などの東洋医学の述語についてのCさんの認識が、L先生の指導が構築する身体の社会的意味によって直接規定されるのではなく、Cさん自身の身体感覚によって媒介されていることが挙げられる。

第三に、Cセンターの練習において、L先生は太極拳の正統を継承させるべく生徒の動作と姿勢を厳密に規定しようとし、また、生徒自身もL先生の視線を内面化して自分の身体を監視しようとするが、こうした意思に抵抗する身体感覚のために、生徒はみずからの身体を監視する主体になることはできず、主体化＝従属化は達成されない。したがって、Cセンターの練習において規律＝訓練は失敗しているといえる。

規律＝訓練の失敗の具体例としては、L先生とBさん自身の意思のコントロールの及ばないところでBさんの身体に経絡の感覚の持続的構造が形成されたことが挙げられる。さらに、この構造のために、それまではL先生とBさんの意思が規定していたBさんの動作と姿勢が修正され、また、BさんがCセンターを離れて一人で練習できるようになったことも重要である。第二に、Kさんが自分の動作を、L先生の指導によって社会的に規定されたものとして外側から知覚するのみならず、自分の身体感覚では十分に規定できないものとして内側からも知覚できたことが挙げられる。第三に、Cさんが、L先生の指導によって構築される身体の社会的意味の構造を直接内面化したのではなく、自分が感じることでできる身体感覚に依拠して、「理解」はできるが「想像」はできないと距離を取っていたことが挙げられる。

## 6 結 論

本稿では、身体技法の習得の動機・実践における認知の変化・主体性の変化という三つの視点から、C太極拳センターで練習する三人の生徒の身体技法の習得の具体的なありようを考察してきた。その結果、身体技法の習得において、社会的位置の刻印を身体に刻み込もうとする意思に対して、身体がどのように抵抗するかが明らかになった。ここで、身体の抵抗の特徴を整理しておきたい。

第一に確認したいのは、抵抗する身体は可塑的な素材ではなく、社会構造と矛盾する特定の構造を持っているということである。そのために、行為者の動機・認知・主体性はいずれも、社会構造によって直接規定されるのではなく、社会構造と身体の構造の矛盾によって弁証法的に形成される。

たとえば、すでに確認したように、Cセンターの太極拳の身体技法は、イギリスにおいて中国のグランドマスターの伝統と権威を継承することで社会構造における特定の位置を占めてい

るが、BさんがCセンターの練習を開始した動機はこの社会的位置に還元できない。というのも、Bさんの動機のひとつは、サッカーとホッケーの練習で膝を痛めてしまったため、「粗野な力、生の力」に頼らない運動がしたいと思っていたためだからである。これが意味するのは、当初のBさんにとって、自分自身の身体の構造が「粗野な力、生の力」に頼った動作しか許さないものとして知覚され、逆に、太極拳の技法がより有効な動作を可能にするものとして知覚されていたということである。この矛盾のために、Bさんは自分の身体の抵抗を介してCセンターの身体技法の有効性を認識することになり、Cセンターの練習に参加する動機のひとつが形成されたのである。

第二に、身体の構造はきわめて多面的であるということである。この多面性は、身体の構造がそれと矛盾するところの社会構造の多面性に由来する。

この多面性の一例を、Bさんの動機を形成した身体の構造について挙げるができる。BさんはCセンターの練習に参加した動機として、「粗野な力、生の力」に頼らない運動がしたいと思っていたことを挙げていたが、同時に、自分がそれまで経験してきた詠春拳・競技武術・空手の動作が、「十分に流れていない」ように思えたことも挙げている。これが意味するのは、Bさんが自分の身体の構造を、一方で、太極拳の動作と比較して「粗野な力、生の力」に頼った動作しか許さないものとして知覚し、他方で、太極拳の動作と比較して「十分に流れていない」動作しか許さないものとしても知覚していたということの意味する。したがって、Bさんは、Cセンターの社会的位置を反映した太極拳の身体技法に二つの異なった側面を知覚し、それぞれに対して矛盾する存在として自分の身体の構造に二つの異なった側面を知覚したといえる。

第三に、身体の構造は時間とともに不規則に変化するということである。Bさん、Kさん、Cさんの経験を比較すれば明らかなように、同じCセンターで同じ時間だけ練習していても、それぞれの生徒の身体の構造の変化の仕方は異なっており、それぞれの生徒が次にどのような変化を経験するかは本人にもL先生にも予測がつかない。

このもっとも顕著な例は、Bさんが「体中の経絡」に「エネルギー」が流れるのを感じられるようになったときのように、一定の時間内に変化が起こり、変化の結果が持続的な場合である。だが、Kさんが「エネルギーの急激な流れ」を突然感じたときのように、突発的な変化ののち、変化の結果が持続しない場合もあり、また、Cさんの場合のように、変化がほとんど知覚されない場合もありうる。そのうえ、経絡の感覚の持続的構造を知覚できた後でも、この構造が不変であるという保証はなく、変化の可能性はつねに開かれている。そのため、ある身体について特定された構造の諸側面が、すべて同一の構造に属するものなのか、あるいは、諸側面を特定する過程で時間の経過とともに構造それ自体が変化してしまったのかを区別することは困難である。

これら三点を総合するなら、身体は社会構造の刻印に抵抗する構造を持っているが、この構造は多面的であるうえ不規則に変化するため、きわめて特定しにくいとまとめることができる。そのため、現象する多様な身体の構造のうち、同一の構造の諸側面を示すものと、構造の変化を示すものを区別すること、あるいは、本質的なものと派生的なものを区別することは、いずれも困難であるといえる。これらの区別は、自己の身体の構造について感覚的に直接知覚するか、あるいは、他者の身体の構造について客観的根拠のない類推を行うことによってしか行うことができないかにさえ見える。

このような困難に直面したとき、身体技法を習得する行為者の動機・認知・主体性のいずれを特定するにあたっては、身体の構造を無視して、もっぱら社会構造だけに着目する誘惑に駆られたとしても不思議ではない。しかし、行為者は社会構造が規定する身体技法を直接的に身体化するわけではなく、それぞれに多様な身体の構造を媒介としてみずから習得すべき身体技法の有効性を判断し、身体の構造と社会構造の弁証法として認知と主体性のありようを形成している事実を捨象してしまえば、身体技法を社会的再生産の媒介として捉えることしかできなくなってしまう。

とはいえ、身体の構造の同一性を積極的に特定することは本稿の目的ではなかった。社会構造を刻印しようとする意思に対して身体が抵抗し、社会構造と矛盾する多様な身体の構造が浮かび上がるという逆説が具体的に示されたことで、本稿の目的は十分に達せられたことになるだろう。

太極拳教室の調査から導かれた知見は、どのような一般的含意を持つだろうか。太極拳の身体技法ほど、動作や姿勢が厳密に規定されている身体技法であっても、これを習得することは、この規定の構造を身体に刻印することではなく、この構造と身体の構造のせめぎあいとして捉えることができた。このことから、どれほど規定的な枠組みを強制する社会構造であっても、身体の対抗を完全に排除しきることはできないことが演繹できると思われる。それにともない、威光模倣・ドクサ・規律＝訓練という三つの述語についても、社会構造の決定論というニュアンスを排除して、かわりに、身体の抵抗としてのエージェンシーを視野に入れたものとして再構成することが必要になるはずである。

**謝辞** 本研究のための調査を許可していただき、また、多方面にわたる協力も惜しまれなかったし先生ならびにCセンターの生徒のみなさんに感謝いたします。

本研究は日本学術振興会海外特別研究員（平成18年度採用）として行いました。渡英の機会を与えてくださった日本学術振興会、ならびに、在職中の渡英を認めてくださった京都大学人文学研究所のみなさんに感謝いたします。

注

- 1) 太極拳の起源については諸説があるが、ここでは最も一般的な説を紹介する。
- 2) オールド・トラフォードは、マンチェスター・ユナイテッド FC の本拠地で、全英最大の観客収容数をもつサッカースタジアムがあることで知られる。
- 3) L 先生に対するインタビューは 2007 年 6 月 22 日に行った。
- 4) 他に、木曜日の 10:00～10:50 に行われる内気功のクラスにも参加したが、ここでは取り上げない。
- 5) 陳氏の第 9 世陳王庭が太極拳を創始したため、太極拳の第 11 世伝人は陳氏の第 19 世である。
- 6) 内気功とは、一般的な気功よりも意識の働きに重点を置いた気功である。一般的な気功が身体の各部を動かして外部から気を活性化するのに対し、内気功は瞑想によって内部から気を活性化するという。
- 7) 「太極」の拼音（ピンイン）表記は Tai Ji であるが、拼音が普及する前に英語圏で用いられていた ウェード・ジャイルズ式表記では Tai Chi であり、イギリスでは後者が一般的である。ウェード・ジャイルズ式本来の発音規則に従えば、Tai Chi は「タイジ」に近い音で読まれるべきであるが、イギリスでは英語的な発音規則に従って、「タイチ」に近い音で読まれるのが普通である。L 先生は、イギリスに来た当初は「タイジ」と発音していたが、これを聞いたイギリス人に、「タイチのことか」と聞き直されることが多かったため、最初から「タイチ」と発音するようになり、表記も、あえて Tai Ji ではなく Tai Chi を用いるようになったという。
- 8) ウェブサイト・教室の空間・諸活動の三つの側面から C センターの社会的位置を導き出すさいの手続きが、批判的視点を欠いているという批判も考えられる。しかし、本稿では、これらの側面が、C センターの社会的位置を表象する認知的な媒体であるのみならず、C センターの社会的位置を遂行的（パフォーマンス的）に構築する手段的な媒体でもあることを重視したい。仮に、ウェブサイトや教室の空間における社会的位置の表象に誇張があったとしても、そのような誇張が遂行されたことは事実であり、こうした遂行の反復こそが現実の社会的位置を構築するのである。ましてや、C センターの諸活動においては、社会的位置の表象と現実の区別そのものがないことになる。たとえば、L 先生が Z 先生をマンチェスターに招聘したことは、Z 先生と C センターの結び付きの緊密さを表象するのだろうか、それとも、この招聘という遂行（パフォーマンス）そのものが、Z 先生と C センターの緊密な結び付きを構築するのだろうか。諸活動において両者を区別できないならば、原理的には、ウェブサイトと教室の空間においてもできないはずである。
- 9) B さんのインタビューは 2008 年 1 月 9 日に行った。
- 10) 詠春拳（えいしゅんけん、Wing Chun Kung Fu）とは、素早い直線的な上半身の動きが特徴の拳法で、ブルース・リーが練習したことで有名である。競技武術（Competition Wushu, Modern Wushu,あるいは、たんに Wushu と呼ばれる）は、伝統的な中国武術の諸流派から技を取り出して体系化したうえで競技ルールを制定することで、中国国家公認の武術として作り出されたものである。
- 11) 「グランドマスター（Grandmaster）」は、日本でいう「宗家」ないし「最高師範」に相当し、各支部の「マスター（Master）」つまり「師範」を統括する存在である。
- 12) 「任脈（にんみゃく、Renmai）」は胴体前面の中心を口から下にかけて通る経絡で、「督脈（とくみゃく、Dumai）」は身体背面の中心から頭頂を越えて口まで通る経絡である。「会陰（えいん、Huiyin）」は肛門の少し前にある経穴である。

## 身体技法の習得と身体の抵抗（倉島）

- 13) Bさんは、この経験のあとで中国医学の経絡の図を見たとき、次のように感じたという。「まさにそれだと思ったんだ。中国の経絡の図を見てね。わあ、僕はこれを知っているぞ。起こっているのはこれだったのか、とね。」
- 14) Kさんのインタビューは2008年1月26日に行った。
- 15) Cさんのインタビューは2008年2月12日に行った。
- 16) 「百会（ひゃくえ、Baihui）」は頭の頂点の少し後ろにある経穴である。他の用語については注12を参照。

## 参考文献

- Bourdieu, P., *Esquisse d'une théorie de la pratique, précédé de trois études d'ethnologie kabyle*, Librairie Droz, 1972 (*Outline of a theory of practice*, tr. Nice, R., Cambridge University Press, 1977).
- *La distinction. Critique sociale du jugement*, Les Editions de Minuit, Paris, 1979. (石井洋次郎訳『ディスタンクシオン I, II』藤原書店, 1990.)
- Foucault, M., *Surveiller et punir : naissance de la prison*, Gallimard, 1975 (田村俶訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社, 1977).
- 倉島哲『身体技法と社会学的認識』世界思想社, 2007.
- Margolis, J., 1999, "Pierre Bourdieu: Habitus and the Logic of Practice", in Shusterman, R., ed., *Bourdieu: a Critical Reader*, Blackwell Publishers, 64–83.
- Mauss, M., 'Les techniques du corps' [1936], in *Sociologie et anthropologie*, Presses Universitaires de France, [1950] 1968. (有路亨・山口俊夫訳「身体技法」『社会学と人類学 II』弘文堂, 1976, pp. 121–156, Brewster, B. tr., 'The Notion of Body Techniques', in *Sociology and Psychology*, Routledge & Kegan Paul, 1979, pp. 95–123.)

要 旨

身体技法の習得は、身体が社会的位置の刻印を受けることで、社会構造の再生産の媒体として形成されることであると一般的に考えられている。このような理解は、身体技法の概念を最初に提出したマルセル・モースの議論にも、身体をめぐる現代の状況を考えるうえで欠かせない二人の思想家、ピエール・ブルデューとミシェル・フーコーの議論にも認めることができる。

しかしながら、身体は、社会的位置の刻印を一方的に受けるだけの、可塑的な素材ではないように思われる。というのも、どのような身体技法であれ、それを身に付けようとするときに、身体が自分の思うままにならない場合があることを、われわれは経験的に知っているからである。このような、意思に対する身体の抵抗（以下、「身体の抵抗」と略記）を認めたならば、身体技法の習得を、身体に対する社会的位置の一方的な刻印として捉えることはできないのではないだろうか。

本稿では、身体の抵抗を捉えることで、身体技法の習得と社会的再生産の一見して必然的な関係を解体することを目指す。その方法として、最初に、身体技法の習得と社会的再生産をめぐる理論のうち主要なものを検討し、身体の抵抗を認めることで両者の結び付きを解けることを示したい。次に、イギリスはマンチェスターにおける太極拳教室であるC太極拳センターを考察することで、身体技法の習得過程における身体の抵抗のありようを具体的に描き出すことにしたい。

調査の方法としては、16ヶ月間（2006年1月～3月、2007年1月～2008年3月）にわたって週に二回（火曜日と木曜日）の練習の参与観察を行ったほか、指導員と上級クラスの生徒の大部分（指導員2名、生徒12名）の個別インタビューを行った。

キーワード：身体技法、威光模倣、規律＝訓練、太極拳、身体の抵抗

Abstract

The purpose of this paper is to propose a new way to understand the acquisition of body techniques, by way of identifying 'corporal resistance' in the course of the acquisition of Tai Chi techniques in a class in Manchester, UK. Conventionally, acquisition was pictured as the embodiment of the social position occupied by the agent, with the implication that the body is an infinitely plastic object that can be given any form that society demands. This picture can be identified in the theories of Marcel Mauss, Pierre Bourdieu, and Michel Foucault. Contrary to the common understanding, participant observation on the Tai Chi class has shown that agents experience their own bodies resisting their will to acquire certain techniques, and that this resistance plays a key role in the formation of motivation, cognition, and the subject. In order to gather data, I have done participant observation held at the main centre building for 16 months (January 2006 to March 2006, and January 2007 to March 2008), by joining in twice weekly evening classes on Tuesdays and Thursdays. In addition to participating in the training, I have also conducted personal interviews on most of the instructors and the regular students (2 instructors, 12 students).